

テレックス電子交換システム

国際テレックス通信のトラフィック増大に対応するため、1966 年（昭和 41）、海外でも実用化されていなかった全電子式交換機の研究開発に着手した。最大の課題は、大容量・高機能化を図りながら、いかにシステムを小型化するかにあった。その結果、簡単な構成で大量の通信を疎通できる交換方式「キャラクタスイッチング」を考案し、この方式を用いた交換機の開発を行って、69 年に試作実験を終了した。キャラクタスイッチング方式は、通信回線と交換機の結合部に 1 電信文字（キャラクタ）分のメモリを置き、受信信号を 1 キャラクタずつ入力メモリに蓄えたのち、出線側の出力メモリに転送して回線に送出するものである。それまでの時分割電信交換方式と比べ、交換動作の繰り返し周期が長く、高度な多重動作が可能で、交換の大容量化を実現した。

日本初のテレックス全電子交換機「CT-10」は、床面積が従来機の 7 分の 1 で多様なサービス機能を備え、小型・大容量・高性能の次世代機として評価され、外国へも輸出された。

出典：KDD 社史